2014 年度災害
被災者支援活動　報告会

～災害から一人ひとりの大切な命と暮らしを守るために～

特定非営利活動法人
レスキューストックヤード

[2014 年台風 8 号水害] 長野県南木曽支援報告書

文責：浦野　愛

土砂に押しつぶされた家屋

土石流で破壊された河川周辺

名古屋から届けられた資器材

南木曽町災害ボランティアセンター

■南木曽支援の経緯

・7 月 9 日（水）、台風 8 号に伴う豪雨により、南木曽町の梨沢周辺では死者 1 名と住宅等 43 棟が全半壊するなど多くの被害を受けた。

・7 月 11 日（金）南木曽町社協が災害ボランティアセンター設置。翌 12 日に活動開始した。

・三遠南信地域には、飯田市・豊川市・豊橋市・湖西市・浜松市のボランティア団体や個人を中心として相互の交流学習を目的に作られた「三遠南信ネットワーク」が存在し、なごや防災ボラネットも団体会員として加盟していたため、日頃から交流があった。

・浜松市社協も三遠南信ネットワークに加盟していたこと、そして、浜松市社協が長野県社協と元々繋がってこともあり、長野県社協経由で南木曽町社協に資器材を「なごや災害ボランティア連絡会」より借用することを助言。7 月 12 日（土）、4t トラックにて RSY スタッフ高木が資器材と共に現地入り。

・水害の被害が大きかったため、資器材だけでなく、災害ボランティアセンター運営補助や平日のボランティア確保をするため、人も送る必要があると考えた。そして、なごや防災ボラネットや繋がりのある三遠南信ネット

一枠、愛知県や岐阜県のボランティア団体に声かけをし、有志で「レスキュー南木曽応援隊」という混合チーム（主体：RSY、協力：なごや防災ボラネット、碧南防災ボランティア連絡会、恵那市防災研究会、災害救援ボランティアせとなど）を結成。ボランティアコーディネーターの派遣、および平日の一般ボランティア確保のため、7 月 16 日（火）に 21 名で、RSY よりボランティアバスを運行した。

・その後、数日間 10 名体制で一般ボランティアを入れる準備をしたが、地元社協より「沢山ボランティアに来られても活動がないため、派遣は自粛して欲しい。」という申し出が入り、中止することとなった。

・災害ボランティアセンター運営補助は、引き続き要請があったため、閉所まで派遣を継続した。

・災害ボランティアセンターは 7 月 19 日（土）で閉所し、8 日間で延べ 1,062 名のボランティアが活動。現在は生活復興支援センターとして地元社協が通常業務の中でサロン活動などの支援を行っている。

※「レスキュー南木曽応援隊」の活動

・15 日（火）なごや防災ボラネット 4 名派遣
・16 日（水）RSY ボランティアバスにて 21 名派遣、碧南防災ボランティア連絡会 5 名派遣
・17 日（木）なごや防災ボラネット 5 名派遣、災害救援ボランティアせと 1 名派遣
・18 日（金）なごや防災ボラネット 3 名派遣
・19 日（土）なごや防災ボラネット 2 名派遣

その他、三遠南信ネットワークより、浜松市社協、豊橋防災ボランティアコーディネーターの会、豊川防災ボランティアコーディネーターの会をはじめ、愛知・岐阜県内では、清須市災害ボランティアコーディネーター連絡会、災害ボランティアコーディネーター尾張旭、中津川市社協、陶町明日に向かって街づくり協議会の方々がメンバーへのボランティア募集の声かけ等を行って下さった。

※「なごや防災ボラネット」は震つな会員のため役員のみ交通費・宿泊補助対象とした。

■南木曽支援報告会の実施

・2014 年 8 月 22 日（18:30～20:30）、南木曽支援に関わった団体が集まり今後の支援に向けた意見交換を行った。

（支援活動報告から見えた課題）

・水害の度ごとに問題となる「床下の処理方法」については、誰が見てもすぐに理解できるツール化が必要。

・最近の社協の考え方の中に、災害ボラセンは「泥かき等の作業支援」、復興生活支援センター移行後に「生活支援」という構図ができていないか。生活支援は発災 3 日～1 週間の間ですでにスタートさせる必要がある。

・長野県は発生確率の高い「糸魚川断層」を抱えている上に、山間地域のため大雨による土砂災害が頻発することが予測される災害リスクの高い地域のひとつである。上述の課題を解消し、住民の多様なニーズに迅速にこたえるためにも、近隣地域からの応援を有効に使える日常からの顔の見える関係づくりと、ノウハウ向上が求められる。今後は近隣地域の NPO・ボランティアグループと共に連携の輪を広げていくことで合意したい。

報告会の様子

徳島県海陽町支援活動　報告書

文責：高木　雅成

■　支援に入った経緯

台風 12 号により浸水被害を受けた、徳島県海陽町より災害ボランティア活動資器材の貸与依頼が RSY にあり、8 月 5 日に名古屋市保有資器材を倉庫より搬出。同町へ災害発生当初より、震災がつなぐ全国ネットワーク関係者が支援に入り、日頃からの顔の見える関係から情報共有に努めてきた。

その情報の中で、「災害で食器類が使えなくなってしまった」、「食器類も泥に浸かってしまい、一応キレイにしたけど使うのはちょっと…」という被災者の声や、「数週間頑張ってきた皆さんに一息ついて欲しい」、「これからの生活再建に向けて元気づけをしたい」という海陽町社会福祉協議会の声もあり、ボランティアセンター閉所後の 8 月 23 日に生活再建への支援として、「瀬戸物バザー＆無料ミニ喫茶」を海陽町社会福祉協議会主催で実施した。企画実施にあたり、RSY スタッフ 2 名（高木・林）、RSY ボランティア 2 名、震災がつなぐ全国ネットワーク 1 名（松田）を派遣した。

支援物資は、RSY で日頃からつながりのある「陶町明日に向かって街づくり推進協議会（岐阜県瑞浪市）」より瀬戸物を提供いただき、その他の生活用品は RSY や震災がつなぐ全国ネットワークとつながりのある名古屋・岐阜・新潟・東京の団体・個人の皆様（10 箇所）より提供いただいた。

■　実施にあたる関係先

主催：徳島県海陽町社会福祉協議会

共催：RSY、震災がつなぐ全国ネットワーク

協力：徳島県社会福祉協議会、特定非営利活動法人徳島防災ネットワーク、地元住民の方々、陶町明日に向かって街づくり推進協議会、仁成寺、日用品提供者の皆さま

■　当日の様子

運営にあたり、海陽町社会福祉協議会から 5 名、徳島県社会福祉協議会から 3 名、特定非営利活動法人徳島防災ネットワークから 4 名、地元中高生 5 名、震災がつなぐ全国ネットワーク関係者 5 名、計 22 名で瀬戸物バザー＆無料ミニ喫茶の運営を実施。

瀬戸物バザーでは、皿・茶碗・湯呑などの瀬戸物や、靴・タオル・シャツなどの日用品を安価に販売。無料ミニ喫茶では、被災から 3 週間が経過し、生活を取り戻そうと動かれていた地域住民がホッとひと息つける場を提供するべく、お茶やお菓子を楽しみながら、住民同士やボランティアとの会話ができる場づくりを行った。

海陽町内の被害の大きかった 2 地域を中心に、13 時から宍喰老人憩いの家、15 時から海部公民館をお借りし、計 2 回開催をした。各回とも 150 名近い地域住民にお越しいただき、住民の方からは、「食堂を経営していたが、浸水で食器が全て浸かってしまった。お店を再開するために準備を進めている最中に、瀬戸物バザーの話を聞いて今日やってきた。定食とかも出していたので、同じ大きさのお皿が複数欲しいと思っていた。」、「近所にも食器が無くて困っている人がいてね。（海陽町社会福祉協議会の職員に向け）〇〇さんは来た？あそこの家も困っていたはず。後で声かけてきます。」と、話される方もおり、盛況の内に幕を閉じた。

瀬戸物バザーの売上約 40,000 円は、海陽町社会福祉協議会への寄付とし、以降の生活再建での支援に充てていただくこととした。

＜宍喰老人憩いの家＞

＜海部公民館＞

兵庫県丹波市支援活動報告書
（災害ボランティアセンター運営サポート）

文責：松永鎌矢

■　支援に入った経緯

8 月 19 日に降った大雨により被災した兵庫県丹波市より、8 月 21 日にスタッフ派遣の要請と災害ボランティア活動資器材貸与の要請があり、8 月 22 日より RSY 松永を派遣し、先の台風 12 号による被害で資器材を貸し出していた徳島県海陽町・阿南市の資器材を丹波市へ送付いただくよう手配。

その後、RSY 浦野・高木、災害ボランティアコーディネーターなごやから数名を派遣し、災害ボランティアセンターの運営サポートを行うこととなった。

RSY 松永：8/22～9/6
RSY 浦野：8/26～29
RSY 高木：8/26～9/2、9/7～9
災害ボランティアコーディネーターなごや
椿：8/27～28　　岡田：9/1～2
加藤：9/2～5　　小野：9/2～5

■　丹波市の基本情報

兵庫県の中央東部に位置し、市内西部を南北に日本標準時子午線（東経 135 度線）が通っている。阪神間からＪＲや自動車で約 1 時間 30 分から 2 時間圏域である。中国山地の東端に位置し、急斜面をもった山々によって形作られた中山間地域。人口約 67,780 人。2004 年 11 月 1 日に兵庫県氷上郡に属していた 6 町（氷上町、柏原町、青垣町、春日町、山南町、市島町）が合併し、現在の丹波市となった。今回の水害では、市島町を中心に被災した。

■　被災状況

人的被害：死者 1 名、負傷者 4 名。
住家被害：全壊 44 棟、大規模半壊：10 棟、半壊 49 棟、一部損壊 1 棟、床上浸水 280 棟、床下浸水 2,156 件（9/22 丹波市発表・住家及び非住家の合計数）

■　果たした役割（活動内容）

・災害ボランティアセンター運営サポートやフォロー（特にマッチング班）、運営に関するマニュアル作りのサポート。
・丹波市社会福祉協議会と共に被災世帯へのニーズ調査。現場コーディネート（市ノ貝地区のマッチング調整など）。
・過去の被災地での事例を基にした各種助言（兵庫県社会福祉協議会と連携しながらローラー作戦のマニュアル作成、ニーズのマッピング化、ボランティアの活動範囲についてなど）
・実務者会議（災害対策本部・災害ボランティアセンター・NPO・ボランティア団体など）への参画。

■　個別訪問ニーズ調査について

今回、地元社協と共に被災者の生活状況を把握するためのニーズ調査を実施した。その際配布した、「お見舞いセット」の中に、RSY を通じて『中日本氷糖株式会社』様よりご提供頂いた氷砂糖 504 袋と、『公益社団法人名古屋青年会議所』様からご提供頂いた冷たいスポーツドリンク 400 本を付け、被災された皆様のお手元にお届けした。また炊き出しの中でも、各家庭に配布させて頂いた。このお見舞いセットは、被災者のニーズを聞き取る際の会話のきっかけづくりとして非常に役立った。氷砂糖を手にして「懐かしい～。甘いものが食べたかったのよね」という声や、冷えたスポーツドリンクを手渡すと同時にゴクゴクと乾いた喉を潤していた。少し一息ついた後、「こんなに沢山の人に心配してもらってありがたい。でもやってもやっても作業は終わらない、疲れすぎて食事も自分たちで作れない。まさか自分がこ

んな目にあうとは思わなかった」などという言葉が次から次へと溢れてきた。単に訪問し「困ったことはないですか？今の生活状況は？」などとたずねてもなかなか出てこなかった内容の話も多かったろうと思う。このような被災者の小さな声が次の支援に確実につながる。そのきっかけを作ってくださった皆様に心から感謝したい。

氷砂糖は疲労回復、精神安定などに効果がある。

断水や停電の中、冷たい飲み物はとても喜ばれた。

■　見えてきた課題

災害ボランティアセンターのマッチングシステム

丹波市災害ボランティアセンターでは、ボランティアを被災地区の区長へ派遣し、区長より活動現場（被災世帯）へマッチングするシステムを採用していた。このシステムではニーズ把握が出来ていない場合（特に被災直後）、特に効果があり、地域をよく知る（要援護者世帯・被災世帯など）区長を経由することで、直接被災世帯に派遣する場合に比べ、スムーズかつ必要な場所に必要数のボランティアを派遣することができることがメリットである。

しかし一方で、区長へ大きな負担がかかる、不在や区長自身が被災している場合はフォローや代役が必要となる点がデメリットとして上げられる。丹波市では約一ヵ月災害ボランティアセンターの運営を行っており、その間休み無く走り回ったことで倒れ、入院する区長もいた。災害ボランティアセンターの運営も落ち着き出す、被災後 1～2 週間程度で、直接被災世帯へ派遣する個別表（ニーズ表）での対応システムに変更すべきだった。

応援に入る社会福祉協議会職員の派遣期間

兵庫県社会福祉協議会が募集した、近隣から応援に入る社会福祉協議会職員の派遣期間が 3 日間であり、前後 1 日を引き継ぎの期間とすると実質 1 日のみの活動となる。この場合、入れ替わり立ち代わりでの災害ボランティアセンターの運営となるため、ボランティアの多い週末には、運営がスムーズに行えないという弊害が出る。そのため、最低でも 4 日を派遣期間として派遣を考えるべきではないかと感じた。

床下消毒方法について

床下消毒について、水害対応が主となる災害ボランティアセンターや被災者から、幾度となく「床下がどの程度乾いたら、消石灰を撒いてもよ

いのか？」との質問があったが、全国的に統一した回答がない現状がある。専門家を交えたマニュアル作りが早急に必要だと考える。

兵庫県丹波市支援活動　報告書
（炊き出し＆無料ミニ喫茶）

文責：高木雅成

■　支援に入った経緯

8 月 19 日に降った大雨により被災した兵庫県丹波市より、スタッフ派遣の要請と災害ボランティア活動資器材貸与の要請があり、8 月 22 日より RSY 松永を派遣し、先の台風 12 号による被害で資器材を貸し出していた徳島県海陽町・阿南市の資器材を丹波市へ送付いただくよう手配した。

松永や震災がつなぐ全国ネットワーク（以下、震つな）関係者からの報告の中で、作業負担も大きく住民にかなりの疲労が見られ、一部地域で断水が続いていることから、炊き出しの提供や、休憩場所の設置等の生活支援が重要になると考えられ、震つなをはじめ、RSY のつながりの中で支援が実施できないか関係各所に相談を実施。

震つな会員のシャンティ国際ボランティア会（SVA）より、全国曹洞宗青年会の方を紹介いただき、「特に女性から炊き出し希望の声が上がっている。」と報告を受けた。また、地域の方に聞き取りをすると「1 週間働き続けてもう何もしたくない。」、「疲れて食事を用意するのが大変。」、「コンビニやスーパーの惣菜も 1 週間続くと辛くなる。」など、「食」を切り口に、健康・安心できる環境・疲れの蓄積・遠慮や気兼ねなどに関する課題が多数あることが分かった。そこで、全国曹洞宗青年会をはじめ、つながりのある協力団体に応援を求め、炊き出し支援を実施することとなった。

実施にあたり、被災地域内のどこに拠点を設けられるか課題があった。全国曹洞宗青年会の方に相談すると、協力したいという地元のお寺を紹介いただいた。また、そのお寺より地域でカフェを運営しており断水のため営業は中止しているが、地元の方に向け無料喫茶を実施しているカフェを

ご紹介いただいた。お寺やカフェがある地域は、前山という集団断水している地区であった。日頃のつながりから、地域とのつながりを見出し、紹介いただいたカフェを拠点に炊出しを実施していけることとなり、カフェの名称を加え「ひなたぼっこカフェ・無料ミニ喫茶」と称し、炊き出しをボランティアが担い、カフェで温かいコーヒーを提供しホッと一息つける場の提供を実施した。

以降、断水解消の期間が 9 月末だとわかり、また、地元有志の意向もあり、9 月末までに週 2 回を目途に炊出しを実施していくこととなった。実施に当たり、災害ボランティアセンターのサポートと並行して、以下の期間、震つな関係者が対応にあたった。

RSY 浦野：8/26～29、9/15～16、9/18～19
RSY 高木：8/26～9/2、9/7～9
RSY ボランティア：9/1、9/4、9/16、9/18～19
震つな松田：9/3～6、9/15～16、9/18～19
中部助け合いネットワーク：9/16

■　実施日

▼8 月 29 日（金）：神戸国際支縁機構、地元有志

炊き出し実施の相談を関係各所へ呼びかけた際、神戸国際支援機構よりいち早くお声をいただき、地元有志の皆さんと協力し実施。

▼9 月 1 日（月）、4 日（木）、8 日（月）、11 日（木）：曹洞宗ボランティア、地元有志

全国曹洞宗青年会の方が調整くださり、京都府・兵庫県のお坊さんによる炊き出しが行われた。

▼16 日（火）地元有志、丹波市災害ボランティアネット丹、N 災害ボランテイアネットワーク鈴鹿、中部たすけあいネットワーク、RSY ボランティア

炊き出しを通じて、住民の方から「これから再建にお金もかかるしどうしたらいいのか。」、「行政からどんな支援が受けられるのか分からない。」などの声が聞かれ始めたため、日本災害復興学会の協力を得て、炊き出し会場に地元の大工など専門家によるくらし相談コーナーを設置した。また、RSY とつながりのある中部の学生団体が足湯を行い、地元の方の心と身体を温めた。

▼19 日（金）宮城県七ヶ浜町有志、地元有志、丹波市災害ボランティアネット丹、RSY ボランティア

RSY が東日本大震災直後より支援を継続している宮城県七ヶ浜町の漁師等が「丹波市のみなさんには震災の時お世話になった。その恩返しをしたい。」と、カニ汁など新鮮な海鮮を直接出向き、振る舞ってくださった。また、引き続きくらしの相談コーナーを設置した。

▼22 日（月）、26 日（金）地元有志、丹波市災害ボランティアネット丹

地元有志より、最後は地元の力で実施したいという前向きな声もあり、RSY とつながりのある愛知県安城市の団体と RSY から食材を提供し実施いただいた。

■　支援実施にあたる協力先

ひなたぼっこカフェ・宗福寺・全国曹洞宗青年会・曹洞宗兵庫第二宗務所青年会・丹波市曹洞宗青年会円通会・市島町仏教会・丹波市災害ボランティアネット丹・神戸国際支援機構・七ヶ浜町ぼっけ倶楽部七友会・ボディヶ浜・全国災害復興学会・災害ボランティアネットワーク鈴鹿・安城七ヶ浜交流プロジェクト・中部たすけあいネットワーク・震災がつなぐ全国ネットワーク（順不同）

■　実施の様子

▼炊き出し

　拠点をひなたぼっこカフェの屋外に設け、同カフェもある前山地区を中心に展開。必要機材は、曹洞宗のボランティアよりお借りし実施した。前山地区は、市内で一番被害の大きかった谷上集落をはじめ、各集落で断水が起こるなど土砂流入以外の被害も出ていた。8月末～9月当初は、約100食の提供を行ってきた。同カフェのある集落と谷上など他の集落は距離的に離れているため、同カフェまで取りに来られない集落の住民にたいしては、RSYスタッフが玄関先に持参しお伺いするなど、宅配も同時並行で実施した。また、炊き出し開催にあたるチラシを各集落の自治会長に了承の上、地元有志とRSYスタッフで配布して回った。チラシ配布や定期的な開催、地域の口コミもあり、回を重ねるごとに浸透していき、最終的に約200食を提供するほどとなった。地元有志として率先し実施にあたった地元の婦人たちからは、「料理をしていると気晴らしになる。家に籠っているくらいなら手伝おうと思って出てきた。」と、話される方もいた。計9日間、で約2,000食を提供した。

▼無料ミニ喫茶

　ひなたぼっこカフェが、自家焙煎のコーヒーを無料で提供。炊き出しを召し上がった後に、コーヒーを楽しまれる方が多く、ホッと一息つける場の提供を行った。また、災害ボランティアセンターからの日用品等の物資を店内に置き、生活の下支えも担っていた。

▼くらしの相談コーナー＆足湯

　炊き出し等を通して、被災者より住宅再建に関する不安の声があがっており、制度面での相談は、行政窓口が設けられ対応をしていたが、今後泥に浸かった家屋に住めるのか、建替えなければいけないのか等、被災者の思いに寄り添える形での専門家による相談窓口が必要ではないかと思われ、全国災害復興学会をはじめ地元の大工などに声掛けし、炊き出し会場に相談コーナーを設置し、被災者の不安に耳を傾けた。また、中部の学生ネットワークによる足湯の提供もあり、リラックスした雰囲気を作り出した。

■　支援を通して聴いた住民の声

▼心・身体状況

・セミの声がよく聞こえるね。こんなにセミが鳴いていたんだ。家の片づけで忙しくて、セミの

声も聞こえなかった。休憩も大事だね。
・庭に泥が入ったけど、下流の地域に比べたらね。もっと大変なところはあるし、贅沢も言っていられない。
・一人暮らしで話し相手もおらずさびしかった。いつも通っているひなたぼっこカフェが開いたと聞いたので来た。みんなの顔が見れて嬉しい。
・床下の泥出しも、ボランティアと息子が頑張ってくれた。私は、疲れて病院行くはめになってね。家族みんな仕事やバイトの休みをもらって、今まで片づけてきたけど、さすがにこれ以上休めなくて、合間を見て片づけている。
・観光地もなければ災害もない。平和な所だった。まだ3週間くらいだけど、疲れのせいかな。それ以上経っている感じがするの。
・今は町営住宅に入居して、日中は自宅の掃除をしている。天候が悪くなると恐怖を感じるし、町営住宅に戻ると家が心配で落ち着かない。結局どこにいても落ち着ける状況はない。

▼断水
・断水がきつい。水を毎朝もらいにいかないといけないからね。
・大雨から今まで、使える水の量も限られていてね。食器もきちんときれいにできなかったし、衛生的にも気になっていたの。水が出てほっとしている。
・わたしたちの世代は、川で洗濯もしてきたから、不便だけど水がなくても知恵と経験がある。今の若い子は大変だと思うよ。

▼食事
・知り合いが、水がなくちゃ料理もできなくて大変でしょ、とコロッケとか持ってきてくれてたの。（鍋に入った宅配炊出しを見て）湯気もたって本当においしそうね。
・（筑前煮を見て）ここのところ大根も炊いてないね。いつもはよく煮物も作ったりしていたけど、今はこんな状況（水が十分にない）だからね。ようやく水もまともに使えるし、今日はご飯を炊いたのよ。

▼生活全般
・2階に部屋もあるけど、足腰が悪く上り下りもできない。今は1階の廊下（フローリング）に布団を引いて寝ている。いつも畳の部屋で寝ていたから、今は落ち着かない。
・家の周りの水は引いたから大丈夫だと思っていたけど、雨が降ると臭いの。床下に薄く泥があるだけだったからほっといたんだけど、耐えられなくて今は家族で泥を取り出している。
・家に住めないから市営住宅に入ったの。今日はボチボチ片づけに来てね。お昼まだだから嬉しいね。たまたま通って今日はよかった。いいこともあるもんだ。
・（お話し中に知合いが通り）〇〇さん、どうしてた？わたし町営に移ってね。やることもあんまないから、今度来てよ。電話番号伝えとくから。
・家の補修、家財道具の購入、これからはとにかくお金がかかる。行政からどの程度支援を受けられるのか。あとどのぐらい住むかもわからない家にどこまでお金をかければよいか…。

▼直後の様子・過去の体験
・雨がザーザーザ―恐かった。長く住んだ家だから、一緒に死んでも悔いはなかった。
・当日2時半頃車で地域の様子を確認に回っていた時、急に水かさが増して車が流された。何とか脱出し、近所の家に逃げ込んだが、その隣の家が全壊。俺は一度死んだと思った。
・今までこんな災害はなかった。思い出すのは、20年前の阪神淡路大震災。ずっと丹波に住んでいるから被害にあってはないけど、当時娘が神戸にいて被災したの。1週間くらい、大変だからと丹波へ戻ってきていてね。神戸に戻る時に、水やら食糧を車一杯詰めて送り出した。

兵庫県丹波市支援活動　報告書
（ウキウキうまい秋フェスタ・前山地区復興祈念祭）

文責：浦野　愛

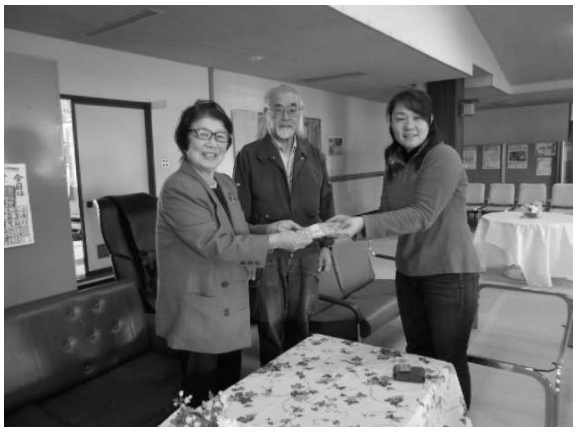
■　支援に入った経緯

８月末～9月に前山地区の断水地域で実施した炊き出し拠点となった、「ひなたぼっこカフェ（鴨坂）」店主・今井氏より、「水害から２ヶ月が経ったが、まだ復興には時間がかかる。被災された方々が一息ついて元気になれる機会を作りたい。」とのご相談を頂いた。

前山地区では、床上・床下浸水の被害を受けた家屋は、床下の乾燥が終了していないため、家の一部の改修しか終わっていない、又は畳入れはこれからという世帯もあった。また、約１ヶ月続いた断水の影響で疲れの蓄積や苦労話も多く、「今だから言える話」もあると考え、この企画を応援させて頂くこととした。

■ボランティア活動支援金への寄付

これまでに、個人や団体の皆様からお預かりしていた「ＲＳＹ活動支援金」をもとに、地元の皆さんに炊き出しの食材・食材運送費を提供させて頂いた。また、スタッフやボランティアの現地までの移動費、イベント材料費等にも当てさせて頂いた。



七ヶ浜町老人グラブ様より 280,250 円の活動支援募金を頂きました。

▼9月９日　ウキウキうまい秋フェスタ

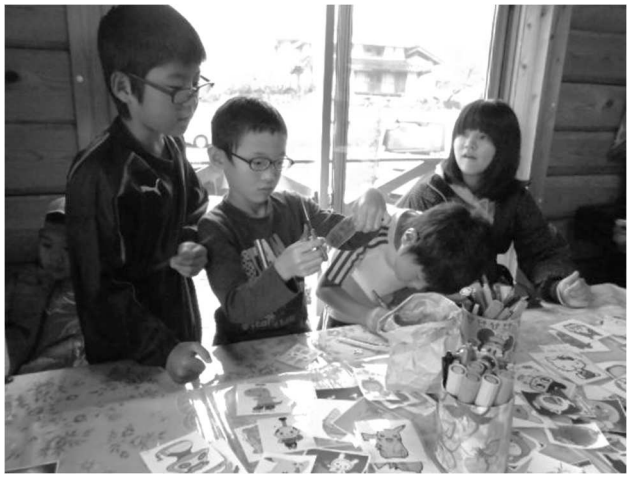
企画・運営は地元住民が主体となって行った。ＲＳＹは、①炊き出しコーナー②子ども遊びコーナー③地元手作り品コーナー④陶器バザーコーナーの運営のサポートを行った。

ちゃんこ鍋と焼き鳥の炊き出しはほぼ完売

会場に設置した机には、約 200 名の住民の方々が入れ替わり立ち代りで座り、おしゃべりも尽きませんでした。

フランクフルトや田楽など、地元の手作り品も目白押し。

曹洞宗青年会の皆さんも、回転焼きや焼き鳥ブースを担当してくださいました。



1日中子どもや親子の姿がたえなかった子どもコーナー

岐阜県瑞浪市「明日に向かって待ちづくり推進協議会」様から頂いた陶器を1個10円～100円で販売。売り上げ約1万円は、「ひなたぼっこカフェ」へ寄付しました。

▼9月10日　前山地区復興祈念祭

当日足湯ブースを担当。10名が利用された。

■支援を通して聴いた住民の声

・被災後、母親と共に親戚の家に避難。家は大規模半壊。母のショックを考えるととても見せられないと思ったが、近所の人たちの協力も経て少しずつでも前に進めればと思う。

・ここへ来て、外の人たちがこれだけ応援してくれているということが分かった。地元ももっと頑張らなくては。

・断水の時は本当に大変だった。子どもも我慢していたと思う。今日1日でもボランティアさんと思い切り遊べてよかった。